

文化・芸術

「ton paris」から 「サン・フェルディナン広場」

1930、33年、水彩、インク、紙
22・2枚×30・2枚



茂田井武 (1908、56年)

茂田井武は童画家と鉛筆などを用いて、出して活躍し、宮沢賢治会った人、景色、カフェ「セロヒキのゴッシュ」などのイメージがやわらかな色彩でみずみずしく描かれ、パリの記憶の宝石箱のようでもあります。

東京・日本橋の旅館の次男に生まれ、中学卒業後、太平洋画会研究会、川端画学校などで絵を学びます。美術を学ぶため、最新の芸術に触れるため多くの日本人画家たちがパリを訪れていたこの時代、茂田井もまたパリの空気を楽しくみくへ渡り、働きながら独学で絵を描きました。

青年茂田井は、パリ時代の絵を「ton paris」と題した一冊の画帳にまとめています。そこには水彩、色

〈名画の扉〉

第34回移動大川美術館展「パリの街角一童画家・茂田井武「ton paris」を中心に」から

※移動展は、桐生市市民文化会館（美喜仁桐生文化会館）展示室で15日から21日まで。
(大谷)